

大丈夫よ！ お母さん！

vol.29

教育コーディネーター 中西美沙子


(今回のテーマ)
子育て、親育て

「働く」ことをして、人は生きています。でも女性が働くとなると、大きなハンデを負うこともままあります。

シングルマザーをテーマにしたドラマが増えているようです。女性の生き方が多様になったからでしょうか。独身。子どもを作らない女性。離婚して子育てをする女性。結婚しないシングルマザーなど、多様な生き方が容認されるようになりました。でも現実には、そのような女性が、働きながら伸び伸びと生きることができる社会ではないようです。それは夫婦で子育てをしている女性にもいえることです。

子育てをしながら働きたい。そう考えているお母さんたちはたくさんいます。「幼稚園に子どもが入園したら」「小学生になったら」働きたい、と。

私にも2人の娘がいます。それぞれが、幼い子どもを育てていて、今は主婦専業。ときどき「もう少ししたら仕

事をしたい」と、相談を受けます。私はすぐには答えずに、ゆつくりと思いを聞くようにしています。それから「何が大切かを考えて、行動してね」といいます。仕事が生きていることの糧であることは間違いありません。でもそれ以上に大切なものがあります。なんとか生活できるなら「小学生に入る頃までは子どものそばにいたほうが良い」と私は考えるからです。子どもの成長は、大人が思っているより早いもの。そして子育ての中で、親もまた成長するのです。

「人は思い出という記憶によって生かされる」といった作家がいます。家族が共有する時間。何気ない子どもの表情や成長の変化。それが実感できるのは、子育てという「時」があるからです。近所にモダンな焼き鳥屋さんがあります。そこを営むご夫婦には、0歳と5歳の子どもがいます。夕方からは子

どもを保育園に預け、その分、昼間は思い切り子どもと接し、遊んでいるようです。彼らが2人で働く理由は、焼き鳥屋という仕事を楽しんでいるからだと、働く姿を見て、いつも思うのです。子どもを育てることと同じように、仕事を楽しくしているのです。

「不安な気分」が今の日本の社会を覆っています。じつとしてはいられない。このままでは乗り遅れる。そんな形にならない焦りのようなものです。安倍首相は「女性に働くチャンスを与えたい」といいます。「企業を中心に女性を置くようにしたい」とも。でもそのための受け皿と方法は、見えてきません。「女性を活用」というかけ声は、緻密な方策があってこそ初めて意味を持つのに。「働かなくて」という焦りは、こんなところからも生まれているのでしょうか。

ジェンダー論で名高い上野千鶴子は、「首相の言葉からうかがえるのは、女性の活躍ではなく安い労働力を得るための方便だ」と批判していました。女性が生きやすく、なおかつ子どもを豊かに育てるためには、開かれた職場がなくてはなりません。「女性を活用」「女性を消費財」とすることにならないよう。

「働くこと」によって失われるものを見極めながら子育てをするのは、大変なことかもしれません。でもその思いがなくては、「本当の家族」とはならないのではないのでしょうか。



Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコール」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索

ピアノシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)
※お求めは浜松市内の谷島屋で。

